

『大江千里集』

現存二系統本成立に関する一試論

藏 中 さやか

は明らかではないという状態におかれているのである。⁽¹⁾

現存する『大江千里集』諸伝本は、異本系統、流布本系統に二大別され、それぞれの代表的伝本は、異本系統が書陵部本（五一―一二三・桂宮本）、流布本系統が伝寂蓮筆本（尚古会複製本）と考えられる。流布本系統諸本はその大半が江戸期写本であるが、すべて伝寂蓮筆本をもとに伝存経路を系統づけることが可能で、伝寂蓮筆本及び定家筆本を透き写した高松宮本の存在から、その発生は鎌倉前期にまで遡られよう。これに対して、異本系統に属するのは次表に示した三本のみであり、冷泉家時雨亭文庫本が書陵部本の親本かと考えられるものの、現在、時雨亭文庫本が冒頭見開き二頁分のみ公開であるため、その結論は得られていない。つまり、研究対象となしうる異本系統本文は、実質的に書陵部本しかなく、異本系統の伝存経路

所蔵者	請求番号	題	備考
冷泉家 時雨亭文庫		『大江千里集』	序文末尾の位階と署名を欠く。南北朝期写。
書陵部	五一―一二三 （桂宮本）	『大江千里集』 附匡衡集	近世写。
国文学研究 資料館	二二二六二 （初雁文庫）	『大江千里集』 附匡衡集 中納言兼輔集	内題に『大江千里集附匡衡集』とある。 書陵部本の新写本。

こういった現存諸伝本研究をふまえた立場からすると、欠題歌や意味不明の歌句を含む流布本系統ではあるが、一概に否定

することは難しく、現存二系統本の詳細な比較・検討が必要であるといえよう。以下、双方の代表的伝本である伝寂蓮筆本、書陵部本の、特に、歌順にみられる相違を中心に検討し、二系統間の関係を明らかにしていきたい。

両本の差異は、序文中の語句異同・「千里集」奉進年・千里の位階の異同にはじまり、句題の有無や歌句の欠脱、小異に及ぶ。歌数の上では、次表のような差異がみられる。

	春	夏	秋	冬	風月	遊覧	離別	述懷	詠懷	計
伝寂蓮筆本	21	12	22	12	11	13	12	12	10	125
書陵部本	21	14※	21	12	11	13	12	12	10	126

※「風月」部の一首が重出

表から「夏」・「秋」各部に差異があり、重出歌のために総歌数で書陵部本が一首上回ることが明らかであるが、実際には両本に歌順の異同がみられ、書陵部本の一首重出に伴う歌順異同、前後二首の入れ替わり等、計七個所にのぼる歌順異同を指摘することができる。

次表は、この歌順異同状況を示したものである。上段には伝寂蓮筆本（尚古会複製本翻刻）を、下段には書陵部本（新編国歌大観に拠る）を載せ、両本の異同箇所を傍線で結んだ。尚、以下の本論は伝寂蓮筆本を中心におこない、用いる歌番号は、特に記したもの以外は、すべて伝寂蓮筆本に付した番号に統一する。

部	翻刻 伝寂蓮筆本	異同	書陵部本（新編国歌大観）
1	咽露山登啼尚少		咽露山登啼尚少
2	登聲誘引米花下 うくひすのなきつる聲にさそはれて花のもとにぞ我はきにける 雀閑何処無尋春		登聲誘引米花下 うくひすのなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞ我はきにける 雀閑何処無良春
3	しづかなるときをたつねていつこにか花のありかをともにたつねん		しづかなるときをまとめていつくにか花のあたりをともに尋ねん

		春																		
23	無成本 鶯多過春詣 うくひすはすきにし春を、しみつ、なくこゑおほきころにそありける	22	春桑長定夏陰盛 このめはるさかえこし(欠)たなれははなのかけとそなりまさりける	16	送春那得不慇懃 あかてのみすきゆく春をいかでかはこゝろをいれておしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがおほしき春はた、あけんあしたそかきりなるへき	15	送春那得不慇懃 あかてのみすきゆく春をいかでかはこゝろをいれておしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがおほしき春はた、あけんあしたそかきりなるへき	14	歳時春猶少 とし月にまさるとしなしと思へばや春しもつねにすくれたるらん	13	花下忘帰因美景 花をみてかへらんことのわする、は色こきはなによりてなりけり	12	老眼花前暗 としふかくおひぬる人のかなしきはさけるはなさへおとるなりけり	11	あたと絶えてしつげき山にさく花のちりはつるまでみる人もなし	10	あたと絶えてしつげき山にさく花のちりはつるまでみる人もなし 落盡閑華不見人	9	夜風吹送毎年春 はかなくてそなる風のとしをへて春ふきおくることぞあやしき

三	春桑長定夏陰盛 このめえ春さかへこし枝なればなつのかけとぞ成りまさりける	三	歳時春尚少 としときにまさるとしなしと思へばや春しもつねにすくなかるらむ	二	老眼花前暗 年ふかく老いぬる人のかなしきはさける花さへくらきなりけり	一	あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	二	あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	三	あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	四	花をみてかへらむことのわするは色こきかぜによりてなりけり	五	あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	六	あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	七	あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	八	あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	九	夜風吹送毎年春 はかなくて空なる風の年をへて春ふきおくることぞあやしき
三	三 春桑長定夏陰盛 このめえ春さかへこし枝なればなつのかけとぞ成りまさりける	三	三 歳時春尚少 としときにまさるとしなしと思へばや春しもつねにすくなかるらむ	二	二 老眼花前暗 年ふかく老いぬる人のかなしきはさける花さへくらきなりけり	一	一 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	二	二 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	三	三 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	四	四 花をみてかへらむことのわするは色こきかぜによりてなりけり	五	五 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	六	六 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	七	七 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	八	八 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	九	九 夜風吹送毎年春 はかなくて空なる風の年をへて春ふきおくることぞあやしき
三	三 春桑長定夏陰盛 このめえ春さかへこし枝なればなつのかけとぞ成りまさりける	三	三 歳時春尚少 としときにまさるとしなしと思へばや春しもつねにすくなかるらむ	二	二 老眼花前暗 年ふかく老いぬる人のかなしきはさける花さへくらきなりけり	一	一 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	二	二 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	三	三 あたと絶えてしつげきやどにさく花のちりはつるまでみる人ぞなき	四	四 花をみてかへらむことのわするは色こきかぜによりてなりけり	五	五 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	六	六 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	七	七 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	八	八 あかすのみ過ぎゆく春をいかでかはこゝろにいれてをしまさるへき 春光只是有明朝 かねてよりわがをしき春はただあけむ朝ぞかきりなりける	九	九 夜風吹送毎年春 はかなくて空なる風の年をへて春ふきおくることぞあやしき

秋																							
44	紅樹蟬鳴 もみちつ、色くれなるにみゆる日はなくせみさへやなくはなりぬる (欠題)	45	あきのよをさむみなきつる虫のねはわかやとにこそあまたきこゆれ (欠題)	46	ゆくかりのあきすきかたにひとりしもとにをくれてなきわたらん (欠題)	47	ふくかせのをとかくさへきこゆれはおくつゆさへもさむくもあるかな (欠題)	48	このはみなからくれなるにしくるとでしものさらにもおきまさるかな (欠題)	49	あきのよをさむみなきつ、ゆくかりのしもをしのきてゆきかへるらん (欠題)	50	しの、めに秋をく露のさむければ、ひとりしもむしのなくなる 鳥栖紅葉樹	51	あきすきはちりなん物をなく鳥のまつもみちはのえたにしもなく 秋風過盡無書到	52	秋のよをかつはなきつ、すくれともまつことつてはみゆるよもなし 寒風飛	53	ゆくかりのとふ事はやくみえしよりあきはかきとりとおもひなりにき 寒風聲静客愁至	54	なくかりのこまたにたえてきこえねはたひなる人を思まさりぬ 寒風 (欠題)	55	なくせみのこまたかくのみきこゆるはあきすむ、しの秋そしるらし 迎冬光有好風

哭	紅樹欲無聲 もみちつつ色紅にかはる木はなくせみさへやなくはなりゆく 啼秋啾啾虫	望	涼風露転寒 秋の夜をさむみなきつるむしのねはわかやとにこそあまたきこゆれ 吹く風の音たかくのみきこゆればおくつゆぞたださむけかりける 旅雁秋深独別群	哭	行くかりも秋すぎがたに独しも友におくれてなきわたらんむ 樹紅霜更置	吾	木の葉みなから紅にしぐるとで霜のさらにもおきまさるかな 秋雁肩霜掃	吾	あきの夜をさむみわびつつ鳴く雁の霜をのみきてとびかへるかな 曉天秋露一鳴蟬	吾	しののめに秋おく露のさむければただひとりしもせみのなくらむ 鳥棲紅葉樹	吾	秋すぎばちりなむものをなく鳥のなど紅葉ばの枝にしもすむ 秋雁過尽無書至	吾	秋の夜を雁はなきつづきゆけどまつことのははくるとしもなし 寒鴻飛急覚秋深	吾	ゆく雁のとぶことはやくみえしよりあきの限とおもひしりにき 寒鳴声静客愁重	哭	鳴くかりの声だに絶えてきこえねば旅なる人はおもひまさりぬ 迎春光有好風光
---	-----------------------------------------------	---	-------------------------------------------------------------------------------------	---	--------------------------------------	---	--------------------------------------	---	------------------------------------------	---	----------------------------------------	---	----------------------------------------	---	-----------------------------------------	---	-----------------------------------------	---	-----------------------------------------

月		冬										
73 70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	
清景難逢 雲はれてよき月かけもつねならずあらんかきりはおしみこそせめ		柴原日暮隨風捲 わびてふるやとにもかりのくれゆけはふくかせのみとさしなりける	月照波心一影珠 てる月はなみのこゝろにひかされてひとつかたにもみえわたるかな	風鰭白浪花千片 おきへよりふきくる風はしらなみの花とのみこそみえわたりけれ	長年老不借光陰 かくはかりおいぬとおもへはいまさらにひかりのすくる事もおほへす	ひとりゐてもゆるはたるにむかへはやくおともなきみとそなりぬる (欠題)	霜々未殺藥々草 よひくにもたにおく霜のさむければくさはをたにそからせざりける	老眼早覺常殘夜 おひてぬるめは、やさめてとこしなへよはにすくればねをのみそなく	十分一盞暖於人 あくまでにみてるさけこそさむきよは人の身までにあた、まりけれ	年々只是人空老 としくとかすへこしまにはかなくて人はおひぬるものにそありける	覺雪多於跣下霜 わか、みのみなしらゆきとなりゆけはおけるしもとどころかれけり	心灰不改爐中火 ものお思こゝろはこひとくたれとあつきたきにはおよはざりけり

74	清景難逢宜愛惜 雲はれてよき月影つねならずあらむかきりをはしみこそせめ	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60
		柴原日暮隨風捲 わびてすむやとにひかりのくれ行けばふく風のみぞとさしなりける	月照波心一顆珠 てる月は浪の心に照されてひとつたまとぞみえわたりける	風鰭白浪花千片 興つより吹きくる風はしらなみの花とのみこそみえわたりけれ	長年老不借光陰 かくはかりおいぬと思へばいまさらにひかりのつくるかげをしまず	抱膝灯前影伴身 独してもゆるはのほにむかへれば影をとみなふ身とぞ成りぬる	霜々未殺藥々草 よひよひにまだおく霜のかるければ草葉をだにもからさざりけり	老眼早覺常殘夜 老いてぬるめはやさめぬとこしへよはにあくればねでのみぞふる	十分一盞暖於人 あくまでにみてる酒にぞさむき夜は人の身までにあたたまりける	年々只是人空老 としくとかすへこしまにはかなくて人はおひぬるものにそありける	覺雪多於跣下霜 我がかみのみなしら雪と成りぬればおける霜にもおとらざりけり	心灰不及爐中火 もの思ふ心はひとくたれとあつきおきにぞおよばざりける	

述 懷	離 別	遊 覽	風
104 ……… さためなきこゝろひとつをなしつるそいのちをのふるものにそありける 自静其心延寿命	103 ……… 沈吟離別情 そこなくものをそおもふありてのみわかる、ことを、もふわか身は	92 ……… 涙流雙袖面成文 なくみなみこふるたもにかゝりてはくれなるふかきあやとこそみれ	91 ……… (欠題) たにみつこのことのねたえすきこゆればときのまをたにへたてすそみる
		79 ……… 雲もなくたには山さへはれゆけはみつのいとこそあらたなりけれ 山雲初晴水色新	78 ……… おしみてもとめまほしきはるかせのふきすきかたくなりぬとおもへは 可憐春風老
		77 ……… てる月のみやこはかりはありといへとたつねてゆかむ程そしられぬ 月宮有路無恩人	76 ……… さためなくふきくるかせはかきわけてなとかしけきに人につくらん 風景閑閑人
		75 ……… 成本 ふたつともみえぬを月の山ことにてりわたりつゝあきらけきかな 残月照山朝	74 ……… 非暖非寒漫々風 あつからずさむくもあらずよき程にふきくるかせはやますもあらなん

105 ……… さわきなくこゝろひとつをなしつるにいのちをのぶるものはありけり 自静其心延寿命	106 ……… 沈吟離別情 そこひなくものをぞ思ふあかでのみわかることをなげくころは	107 ……… 涙流双袖血成文 なく涙こふる袂にうつしてはくれなるふかき色とこそ見れ	108 ……… 潤水弹琴不仮聴 谷の水ことのね絶えずきこゆればときのまをだにへたてすそみる
		109 ……… 山色初明水色新 くももなくあかきやまさへはれゆけば水の色こそあらたまりけれ	110 ……… 可憐春風老 おしみてもとめまほしきはるかせのふきすきかたくなりぬと思へば
		111 ……… 月宮有路無恩人 てる月の宮にみちはありといへとたつねてゆかむかたぞしられぬ	112 ……… 風景閑閑人 さだめなく吹きくる風をさしわけてなとかしづけきに人につくらむ
		113 ……… 非暖非寒漫々風 あつからずさむくもあらずよきほどにふきくる風はやますもあらなん	114 ……… 残月照山明 ふたつともみえぬを月の山ことにてりわたりつゝあきらけきかな

詠 懷					
115	夢中観楽又縁愁	ゆめにてもうれしきことをみるときはこゝにちりくる身にはまされり			
116		しもわけてみやこたつねにくるかりもはるにあひてはとひかへりけり			
117		はることにあひてもあはぬわが身かなはなのゆきのみふりまかひつゝ			
118		はるのみやはなはさくらんたにさむみうつもるくさはひかりをもみす			
119		しらなみのたちかへりくるかすよりもわが身をなけくことはまされり			
125	ほと、きすさつきまたすそなきにけるはかなくはるをすくしきぬれば			
X					
	夢中観楽又勝然	二六 夢にてもうれしきことのみえつるはただにうれふる身にはまされり			
		二七 雲わけて都たづねにゆく雁も春にあひてぞとびかへりける			
		二八 はるのみや花はさくとも谷さむみむる草はひかりをもみす			
		二九 はるばるにあひてもあはぬ我が身かなはな雪にのみふりまさりつつ			
		三〇 しら波のたちかへりくる数よりもわが身をなけくことはまされり			
	三六 ほととぎすさ月またすそなきにけりはかなく春をすくしきぬれば			

※「風月」部との重出歌

表記したように、「春」部13・14の二首に前後異同、続く「夏」部25・26、「秋」46・47に同じく前後異同、「秋」部最終歌55が、書陵部本では「夏」部第二首目に、「冬」部第七首目62が書陵部本では第十首目に、さらに「風月」部74・75、「詠懷」部117・118の二首間にそれぞれ前後異同がみられる。また、先に触れた書陵部本の重出歌は、「風月」部第三首目「わびてすむ」で、※を付したように「夏」部第三首目にもみえている。以上が両本を比較した際に指摘できる歌順異同箇所である。

次に注目したいのは、これらの異同箇所中五箇所、頭注と

いう形で伝寂蓮筆本の中に「或本」との注記が付されていることである（先の表では、伝寂蓮筆本歌番号横に示した）。この注記は、流布本系統諸伝本中九本にその伝存をうかがうことができる。現在、「或本」にあたる本文は存在せず、伝寂蓮筆本と親本を同じくすると推定される高松宮本には、この注記はみられない。しかし、伝寂蓮筆本に残された「或本」との注記から、寂蓮時代、あるいはそれ以前に、現在みる「千里集」とは違った形態の本文が存在したと想定することが可能となろう。

“或本”との対校注記の付されている歌の番号と、その注記

の意味する内容は次のようになる。

対校注記	意味する内容	歌番号
無或本	或本と校合したところ、或本には記載されていない歌であった	23
或本	或本と校合したところ、本文にはない歌が含まれていたため、或本によって補った歌である	75 26 46
或本連秋	或本と校合したところ、本文にはない歌が「秋」部に含まれていたため、或本によって補った歌である	55

つまり、伝寂蓮筆本は、「或本」と本文校合が行なわれた痕跡を留めているのである。

以下、「或本」との対校注記があるものに関しては、それとの関わりを明らかにしながら、伝寂蓮筆本と書陵部本の歌順異同箇所について、先の表にしたがって、「春」部から順に検討を加えていきたい。

「千里集」では、「春」部をはじめとする四季部歌順は、大むね、季節を追う形で配されている。「春」部異同箇所前後の歌材も、

9 風と春

11 山の落花

13 花とそれを見る人

15・16 惜春の情

10 春の山辺と満開の花

12 花と老人

14 歳月と春

となっており、美しく咲く花からそれを愛でる人、惜春の想いへと移行する。書陵部本の配列は、花をとらえた歌の流れを分断するものであり、その原因は、「としふかく」の年令のとしに、歳月のとしを並記することによって得られるおもしろさを求めた作為にあると考えられよう。

続く「夏」部も同様に、季節の移ろいを追うことができる。

鶯を詠じた歌がその第一首目に位置するが、ここには、春を惜しみながら鳴いていた鶯、つまり老鶯の声が稀になり、蟬や鳥が鳴きはじめ、目を転じると水上に咲く紅蓮が視界に入るといふ、季節の流れに従った歌の配列がある。この中での25「うぐひすは」は、24「うつせみの」と対称をなすものであり、老鶯と言えども季節を考慮すると、25「うぐひすは」は、「夏」部の早い位置におかれるべきものと考えられる。よって、伝寂蓮筆本の位置が支持されよう。また「或本」によって補われたと解される26「ちりまがふ」の一首は、配列上の必然性が感じられず、25「うぐひすは」との「稀」という文字に関する類似が認め

られるのみで、本文としていささか不審を抱かせる歌である。

「秋」部においては、44―50にかけて次のような、数の上での対比から自然風物へと移る配列がみられる。

45 虫があまた 46 雁がひとり

47 風と霜 48 置く霜

49 雁と霜 50 虫と露

このような推移、特に45に対する46を考えれば、伝寂蓮筆本の位置が妥当なものといえよう。

次に「秋」部55の異同を探り上げたい。この箇所は、書陵部本「夏」部冒頭の歌順の形成と関わる。「秋」部55（書陵部本「夏」部第二首目）は、

（欠題）

55 なくせみのこまたかくのみきこゆるはあきすむいしの秋
ぞしるらし〔伝寂蓮筆本〕

蟬去野風秋

三なくせみのこまたかくのみきこゆるは野にふく風の秋ぞ
しらるる〔書陵部本〕

のように、二本間での異同が句題の有無、歌句にみえ、「蟬」という歌材の季節を含めて先達の議論がおこなわれている¹²。諸意見をふまえた上で、竹原崇雄氏は伝寂蓮筆本での直前歌「鳴

雁の」との類似性に着目され、次のように述べられた¹³。

「鳴雁の」の歌に對して「なく蟬」の歌を戯れに類似の形式に従つて詠み加えたものが、そのまま残存し、書写されていく過程の中で混入していったものと考えられるのである。

先に指摘したように、伝寂蓮筆本55頭注に「或本連秋」とあることを考えあわせると、氏の説は妥当なものであり、本来の歌順としては伝寂蓮筆本の通りで、「秋」部最末に歌が一首付加されたものと考えられる。

それでは、書陵部本「夏」部冒頭の歌順の必然性はどこに求められるのであろうか。

書陵部本「夏」部第一首目―第五首目は、

第一首目——伝寂蓮筆本に同じ。

第二首目——伝寂蓮筆本では「秋」部55。

第三首目——「風月」部重出歌。伝寂蓮筆本に無し。

第四首目——伝寂蓮筆本に同じ。ただし、伝寂蓮筆本に「無或本」の注記あり。

第五首目——伝寂蓮筆本に同じ。

という配列である。これらを考えあわせると次のような歌順操作が行われたと推測できよう。左表を参照しながら考察をすすめる。表中の増補は、歌順操作の結果、現在の位置におかれた

と考えられる歌を示す。

書陵部本「夏」部における歌順操作

	書陵部本「夏」部
第一首目	春条長是夏陰成 このめもえ春さかへこし枝なれば なつのかけとぞ成りまさりける
増補 第二首目	<div data-bbox="567 271 684 678" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 蟬去野風秋 なくせみのこゑたかくのみきこゆるは 野にふく風の秋ぞしらるる </div>
増補 第三首目	<div data-bbox="434 302 551 678" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 柴扉日暮随風掩 わびてすむ宿にひかりの暮行けは ふくかぜのみぞとざしなりける </div>
増補 第四首目	<div data-bbox="301 302 418 631" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 鶯多過春語 鶯はすぎにし春ををしみつ なく声おほき比にざりける </div>
第五首目	<div data-bbox="269 271 301 396" style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 蟬不待秋鳴 </div> 空蟬の身とし成りぬる我なれば 秋をまたずぞ鳴きぬべらなる

第四首目「鶯は」は、続く第五首目「空蟬の」の一首の句題

と、同一詩の対句をなす部分が句題であることから、本文としての真憑性は高いと判断される。しかし、伝寂蓮筆本に残された「無或本」という注記から、この一首を欠脱した本文の存在が考えられる。現在は、伝寂蓮筆本、書陵部本双方にみられるが、伝写過程の中で、この歌を失っていた本文があった、という可能性があるのである。

そこで、この「鶯は」をもともと書陵部本原型の本文にはなかったと考え、また「風月」部との重出歌である第三首目「わびてすむ」を後に「夏」部に加わったものと考えて除外する、すなわち第一首目、第二首目、第五首目を並記すると、第二首目「なくせみの」歌が、「秋」部最末から移動された理由が明らかとなる。

書陵部本原型の本文では、「なくせみの」の一首は「秋」部最末に位置していたが、「蟬」の歌が「秋」部最末に位置していることに疑問を感じた書写者が、同一歌材である「蟬」の歌「空蟬の」を見出し、その直前に「秋」部からの移入をはかり、それが本文として定着したと考えられよう。位置の不明瞭な一首があった場合、同歌材に近い位置に収めようとする操作は、至極当然のものといえよう。

こうして「なくせみの」が書陵部本「夏」部第二首目に位置

した結果、第三首目の「風月」部との重出という現象が誘発される。先の表で―線を付した通り、両歌には「風」、「ふく風」という共通語がある。第三首目「わびてすむ」は、直前歌「なくせみの」の類似歌として「風月」部の一首が行間書込という形で加筆され、伝写過程で本文化したものである。この句題が元氏長慶集の「晚春」と題する詩から採られ、同じ詩から句題を採った一首が「春」部に入っていることからも、この歌は本来「夏」部のもものではなかったが、「なくせみの」の影響で「夏」部の一首をも兼ねることとなったと考えられよう。

以上が書陵部本「夏」部にみられる歌順操作であるが、このように「わびてすむ」の重出の原因を「なくせみの」の一首に求めると、この歌の下句は、書陵部本表記「野にふく風の秋ぞしらるる」に従うこととなり、欠題となっている伝寂蓮筆本の方に、書写過程で混乱、誤記が生じたものと考えられる。

再び二本間の異同に戻り、「冬」部内の異同、62「としく」との位置についての考察を加える。ここは「或本」との注記とは無関係な箇所であるが、やはり、書陵部本の歌順に作為的なものが感じられる。60・64には、冬の風物と結びつけた人事詠が配され、そこには冬から人生の冬すなわち老を連想した千里の意識も垣間見られる。表から明らかなように書陵部本の歌

順は、この中から「としどしと」だけを抜き出したものであるが、そのねらいは直前歌との対比にあると考えられよう。書陵部本表記に従って、「としどしと」とその直前歌を示すと次のようになる。

霜輕未殺蕤蕤草

臺よひよひにまだおく霜のころければ草葉をだにもからさ

ざりけり

年年只是人空老

突としどしとかぞへこしまにはかなくて人はいぬるもの

にぞありける

「よひよひ」と「としどし」の語感上のおもしろさ、さらに、霜に枯れていない草葉と老いてゆく人間を並記することによって際立つ人間のはかなさ、むなしさが、この改変によって得られる。書陵部本の歌順はこうした効果をねらった意図的なものといえよう。

続いて「風月」部74・75の前後異同を採り上げる。既に後藤利雄氏が指摘された通り、通常考えられる、「風」の詠に対する「月」の詠といった配置が「千里集」「風月」部にはみられない。一部立としてみた場合の「風月」部の歌合的なおもしろさは、現存伝本のいずれの歌順にも存在しないのである。伝寂

運筆本、書陵部本の歌材順は、

伝寂蓮筆本	風	月	風	月	月	月	月	風	月	風	月	風
書陵部本	風	月	風	月	月	月	月	月	風	風	月	風

となり、伝寂蓮筆本の歌順の方が、風が連続することがない。

後藤氏は、「風月」部歌順を解体し、「風」の詠と「月」の詠をつがえることを一部試みられている。「千里集」奉進時の姿に復元するには、こういった操作が必要かと思われるが、伝寂蓮筆本と書陵部本の比較においては、「月」の詠をまとめようとしている書陵部本歌順より、伝寂蓮筆本歌順の方が支持されよう。

最後の異同箇所は、「詠懷」部117・118の前後異同である。「詠懷」部は、他部立と異なり句題を伴わない。「古今集」(巻第十八雑歌下九九八)に入集している、

120 あしたづのひとりおくれてなくこゑはくものうへまでき

こへつがなん

が、身の沈倫を嘆く歌として知られている通り、十首すべてがストレートにあるいは比喩的に不遇を訴える歌である。特に「春」という季と結び付いた歌が多いのが、その特徴である。⁽¹⁷⁾

この「詠懷」部での異同箇所は、「はる」という語ではじまる二首であることから、初句の書写時の誤りから生じたものと考

えられる。116で「春にあう雁」を詠じたものをうけて、117の「春にあひてもあはぬわが身」が置かれたと考えるのが自然であろう。この箇所も、やはり伝寂蓮筆本歌順の方が蓋然性が高いのである。

以上のように、本論文においては、伝寂蓮筆本と書陵部本の歌順異同七箇所について、「伝寂蓮筆本歌順が古態である」という立場にたつて論を進めてきた。「或本」との対校注記が残存していることから、「千里集」には混乱期があったと想定され、撰進時そのままの姿が留められているとは考えられない。

「或本」との校合作業が行われたということは、現在みる「千里集」は、誰かの手が加えられている、修復という過程を経ていると推測されることもある。校合による注記が、頭注や脚注、行間書き入れの形で書き加えられ、その注が伝写過程で消失し、補入された歌の本文文化が進むと考えると、異同箇所のうち五箇所に対校注記が関係することは、重要な意味合いを持つてくる。「或本」と校合した結果を注記によって明示したのが流布本系統(伝寂蓮筆本)であり、或本との関わりが想定できるものの注記を残さず、流布本系統とは異なる歌順で歌を補入したのが異本系統(書陵部本)であると考えることが可能なのである。25・26、46・47、74・75の三個所にみられる前後異同

は、注記の位置が不明瞭であったがために、書写者の解釈の相違が発生し、書陵部本では、順序が逆になるという現象になったものと解される。

さらに次のことが付け加えられよう。この前後異同を生じている26・46・75は「或本」という注記を付されている点から、補われた歌と考えられる。いずれも句題の出典詩が未だに不明であることから、句題による詠歌という方法を模倣した後人の創作が本文化した疑いのあるものなのである。

それでは「千里集」の現存する二系統本が、いずれも本文混乱の後、修復という過程を経て現れたものとする、その時期はいづれかと考えられようか。また、「千里集」の原型は、現在、何を手掛かりに求められようか。

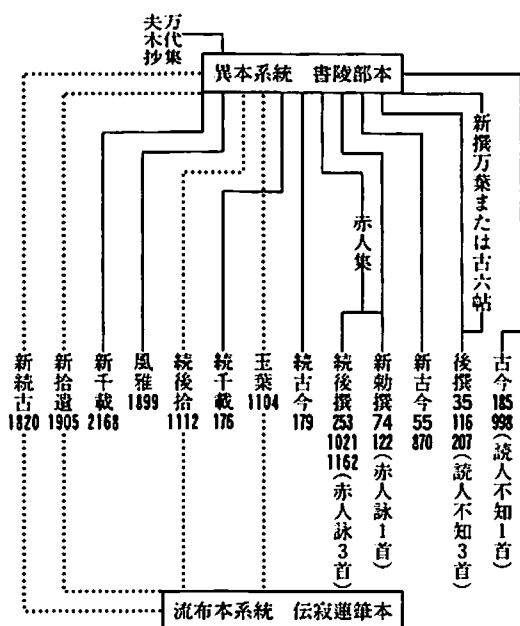
まず、勅撰集における千里詠所載数に注目したい。下表は、千里詠所載数を、千里詠として入集しているものと、説人不知詠、他者詠として入集しているものとに分けて示し、そのうちの「千里集」歌の数を採り出したものである。

集名	古今	後撰	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	玉葉	続千載	続後拾	風雅	新千載	新拾遺	新統古	計
千里詠	10	2※ ₁	3	1	0	1	1	1	1	2	1	1	1	25
説人不知、他者詠として入集している千里詠	1	3	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	8
計	11	5	3	2	3	1	1	1	1	2	1	1	1	33
うち「千里集」歌	2	3	2	2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	20
※「千里集」歌番号	36・120	2・5・72	71・99	5・14	38・68・119	19	102	11	124	115	110	7	88	

※₁「勅撰作者部類」(和歌文学大辞典・明治書院)は679(大江千占、諸本大江千里)をあげているが、ここでは千占歌として数に含めない。

※₂「千里集」歌番号は、伝説題集本による。

さらに、伝寂蓮筆本、書陵部本と勅撰集及び他集との関係を
図示すると次のようになる。



勅撰集名の下に付した番号は、『千里集』歌が各勅撰集中に収められた際の歌番号である。(新編国歌大観に拠る)

—— 採歌材料として確実視できる
..... どちらが採歌材料であったか不明

上図は、採られた歌が二本間で本文異同をもつものであった場合に、採歌材料がどちらの系統かを決定づけられることから作成したものである。したがって、本文異同がないものについては、「.....」どちらが採歌材料であったか不明」として示した。また、『千里集』以外の集が媒体として入るものについては、それも記した。

前表と本図をあわせて勅撰各集と『千里集』の関係を具体的に把握したい。たとえば、『古今集』には千里詠として十首、また千里詠ではなく説人不知として一首の計十一首の千里詠が入集している。うち二首が『千里集』歌であり、歌句の比較から明らかに異本系統から採られたと考えられるが、うち一首が説人不知歌として入集している。このようにみていくと、重複歌も含め三十三首の千里詠が勅撰集に入集し、このうち『千里集』歌が二十首であることがわかる。

ここで今回、特に着目したいのは、次の二点、すなわち、

一、『千里集』には、後撰以後新古今までの勅撰集未入集期があること

二、古今・後撰・新勅撰・統後撰には、説人不知・赤人詠として『千里集』歌が入集していること

である。両点に関連して、既に後藤利雄氏の論究が及んでいる

が、流布本系統・異本系統の成立をからめて、試論を展開していきたい。

各勅撰集にはそれぞれの採歌方針、撰歌範囲が設定されていることは周知の如くであり、たとえば後拾遺では『千里集』はその枠外にある。しかし、拾遺一十載に至る期間での『千里集』歌の未入集という事態は、それだけの理由とは考えられないのである。宇多天皇の命をうけて奉進した旨が序文に記されている『千里集』の歌が、約五十年後の後撰では説人不知歌として入集し、その後、しばらく勅撰集から姿を消している。金子氏は、後撰に説人不知歌として収められていることについて、この時代に句題による詠歌がなじまなかったため、作者名を伏せ、歌物語の詞書を付すことよって入集した、つまり撰者の意図的改変であると解された。しかし、筆者は、この現象は先に指摘した『千里集』本文の混乱のためであると考ええる。千里は、漢詩句から和歌を詠み、しかもその詠みぶりは翻案色の強いものであった。漢詩と和歌の関係史をみる上では、この時期にこういった方法で詠作されたことは、充分注目に値する。だが、当時においてはいかなるものであろうか。この異端の詠法による一家集は、放置され、やがて本文混乱を引き起こしたのではないだろうか。そして、『千里集』本文の復原は、院政期

以来、結び題によって詠歌することが歌合を中心に広く行われるようになり、漢字題に対する関心が強まった歌壇の情勢を背景に行われたのではないか。復原された時期の限定は困難であるが、最終的に鎌倉初期、つまり定家や寂蓮によって本文が書写され、また「或本」との本文校訂がなされた頃に、復原が完了したと考えられよう。

さらに、この『千里集』の解体現象を裏付けするのが、赤人詠として『千里集』歌が入集していることが示す事実、すなわち『赤人集』にみられる『千里集』歌の混入である。既に、諸研究によって明らかな通り、西本願寺本三十六人集中の『赤人集』を代表とする第一類本（本論でいう『赤人集』とは、全てこの系統を指すものとする）には、特有の歌群があり、一一六首中一一二首までが『千里集』歌で占められている。ここにみる『千里集』は、序文・句題を伴わず、和歌部分のみが、著しく歌順の混乱した形で配されている。これは、西本願寺本書写時（天永元年以前）の『千里集』の姿を如実に示すものと考えられよう。また、『千里集』の成立を探る上からは、ここに現存最古態の『千里集』の一変型が残されているとみることできよう。句題詠という特異な形態をもつ『千里集』は、序文・句題を取り外され、誰の集かもよく分からなくなり、歌順も乱

れて流布するうち、いつか『赤人集』本体の前に添加されたものと推測される。後藤氏は、この時期を「拾遺集撰進後、西本願寺三十六人集書写以前の期間の或時期」とされている。このことは勅撰集空白期における『千里集』の事態を示す証として重視すべきことである。

ここまで述べてきたことをまとめると『千里集』は、撰進後間もなく本文混乱期を経て、現存二系統本が成立したと考えられる。本文混乱期の存在を示唆するのが、

一、流布本系統高松宮本（定家筆本透写）が巻頭二首を欠く上、『或本』との対校注記をもたない錯簡を伴った
本文で、別本としての位置を占めること

二、『或本』という、いずれの現存伝本とも異なる本文が

存在したと考えられること

三、『千里集』が勅撰集未入集期をもつこと

四、『赤人集』に、句題を失い、歌順混乱の著しい形態で『千里集』が混入していること

である。

それでは、最後に、再度、伝寂蓮筆本、書陵部本間の歌順相違という問題を探り上げたい。先の考証では、『千里集』という集内部における構成から、伝寂蓮筆本が支持されるという結論を得た。ここでは、『赤人集』との比較を試みたい。『赤人集』にみる『千里集』歌順は、大幅に乱れているものの、そこには錯簡とおぼしき箇所もみられ、原『千里集』の歌順をうかがうことも可能である。両集の歌順を対照すると次のようになる。

西本願寺本『赤人集』の『千里集』混入部、『千里集』流布本系統伝寂蓮筆本 歌順対照表

千里集	赤人集
1	1
※1	2
※2	3
2	4
3	5
4	6
5	7
13	8
14	9
15	10
16	11
17	12
18	13
6	14
7	15
8	16
9	17
10	18
11	19
12	20
94	21
95	22
96	23
97	24

「千里集」に
含まれない歌

※1 2 万葉卷八、赤人
※3 万葉卷六、赤人
※4 万葉卷八、家持

「赤人集」に混入した
「千里集」歌計一二首

春20 夏22・26 秋51 風月69・71・76・77・78
遊覧89 述懐104・109 詠懐112

千	赤
103	95
	空白
105	96
106	97
107	98
108	99
110	100
111	101
112	102
113	103
114	104
115	105
116	106
117	107
118	108
119	109
120	110
121	111
123	112
124	113
125	114
※3	115
	空白
※4	116

千	赤
47	72
48	73
49	74
50	75
52	76
53	77
54	78
55	79
56	80
57	81
58	82
59	83
60	84
61	85
62	86
63	87
64	88
65	89
66	90
67	91
	かきふ
72	92
73	93
102	94

千	赤
21	48
23	49
24	50
25	51
27	52
28	53
29	54
30	55
31	56
32	57
33	58
34	59
35	60
36	61
37	62
38	63
39	64
40	65
41	66
42	67
43	68
44	69
45	70
46	71

千	赤
98	25
99	26
100	27
101	28
75	29
74	30
79	31
80	32
81	33
82	34
68	35
70	36
83	37
84	38
85	39
86	40
87	41
88	42
90	43
91	44
	こわふか
92	45
93	46
19	47

前頁の表は、右に「赤人集」歌順を示し、左にこれに相当するよう、「千里集」伝寂蓮筆本歌を並べかえその歌番号を示したものである。横の矢印は、伝寂蓮筆本歌が連続していること、つまり「千里集」歌順が損われていない箇所を示す。

表および注に記したように、「赤人集」1116には、「千里集」一二五首中の一二二首が含まれ、残る四首が、混入部をはさむような形で配された万葉歌となっている。「赤人集」に混入しなかった「千里集」歌順に示したように、「千里集」「風月」部（歌番号68178）の十一首中五首が「赤人集」に含まれず、また含まれた六首も散在し「風月」部は著しい解体をみせる。が、他は、繁りを部分部分に保って構成されていることが認められる。

伝寂蓮筆本と書陵部本の歌順異同箇所について照合してみると、七箇所中五箇所までが、伝寂蓮筆本に等しい歌順で、「赤人集」にもあらわれ（表中□箇所参照）、残る二箇所も必ずしも伝寂蓮筆本歌順を否定するものではない。

順を追ってみていくと、それぞれ

「春」部前後異同箇所——「赤人集」8・9

「秋」部前後異同箇所——「赤人集」71・72

「秋」部最末部の位置をめぐる異同箇所——「赤人集」77

180

「冬」部内異同箇所——「赤人集」85190

「詠懐」部前後異同箇所——「赤人集」107・108

が相応し、以上五箇所は、伝寂蓮筆本歌順が、現存最古の「千里集」の一型と考えられる「赤人集」歌順と一致する。つまり、断片的ではあるものの、古歌順の名残りを留めていると考えられる「赤人集」歌順には、その内容からも妥当なものと考えられた伝寂蓮筆本が一致するのである。例外となった二例中、「夏」部における前後異同箇所は、「赤人集」に26が混入していないため結論は得られないが、この歌は、句題出典詩が未詳で、直前歌の句題中の文字「稀」が一致することからこの位置に収められた、後人の創作詠である可能性を指摘した歌である。また、残る一例、「風月」部における前後異同箇所は、「赤人集」29・30に書陵部本歌順と同じ配列になっている。しかし、「赤人集」では、「風月」部の半数のみが、二首ずつ三箇所に分断されて混入するという特異な形になっていることから、ここに古態が留められているとは考えにくいのである。先に述べたように、「風月」部は、現存「千里集」の歌順のものにも疑問を残す部立であることも含めると、「赤人集」歌順と書陵部本歌順が一致をみるものの、積極的には受け止めにくいといえる。

ここまで述べてきたことを総括すると、現存二系統本成立に
関して次のような推論が得られよう。

九世紀末に奉進された『千里集』は、漢詩句から和歌を詠む
という特殊形態であつたゆえに、早くも『後撰集』編纂期ころ
に句題と和歌の分離や序文の消失あるいは作者名と集の隔絶と
いう現象にみまわれる。『白氏文集』を中心とする漢詩から句
題を選び、同じ情景を三十一文字にうたおうとした千里の試み
は、当代において評価されず、時代の風潮とは相容れないもの
であつたのだ。ところが、時が流れ、新たな和歌作風が模索さ
れたころ、つまり和歌世界が積極的に漢詩の表現する境地、修
辞法を摂取しようとははじめたころ、この『千里集』も再び脚
光を浴び、乱れた本文の復原作業が開始される。数種の良質本
文が、対照校合されたと考えられるが、その中には、奉進時の
姿をかなり忠実に留めたものがあつたに違いない。こうした善
本を中心に本文校訂がおこなわれ、『千里集』が、流布しはじ
めるようになるが、その本文は、再編成の際の補入や削除とい
う作業を経たものであつた。先に述べたが、伝寂蓮筆本の系統
（流布本系統）は、『或本』によって校訂したことを明示、書陵
部本の系統（異本系統）では明示せずに、『或本』との校合を行
い、本文に採り込んだと考えると、この補入・整備段階に双方

の系統が発生したと想定できるのではないか。現存二系統本は、
いずれも本文混乱の後に誕生したものと思われ、その本文混乱
期は、流布本系統現存最古本伝寂蓮筆本の書写以前と考えられ
る。そして、この混乱期に、既に何度か採り上げられている問
題点である序文記載の「百廿首」と現存歌数百廿五首との五首
の相違や、流布本系統「秋」部にみられる連続五首の欠題が発
生した、とみるべきものであらう。

以上が、伝寂蓮筆本と書陵部本に代表される『大江千里集』
現存二系統本の成立に関して展開した一試論である。

書陵部本が異本系統中のどの辺りに位置づけられる本文であ
るのかは、その親本と目される冷泉家時雨亭文庫蔵本の公開を
待つ他はない。書陵部本が、現行唯一の異本系統本文として価
値をもつことは当然のことながら、そこには後人の歌順操作が
うかがえ、整い過ぎた形態が感じさせる疑惑が存在する。また、
書陵部本そのものが本論でいう『或本』であることは考えられ
ない。それは、注記にいう「無或本」「或本連秋」という形態
をもたないことが端的に示している通りである。現段階では、
書陵部本親本が、『或本』に相当する歌順であれば、あるいは、
何らかの注記をもつ本文であれば、両系統の発生関係はほぼ解
明できるものと考ええる。

従来言われてきた通り、異本系統の優位性は動かし難いものである。しかし、異本系統と流布本系統の間には何らかの形で繋がりが求められるはずであり、それに触れることなくしては、異本系統の優位性は確立できないと考える次第である。

序文・句題を欠落し、歌順の乱れた『赤人集』歌の表記が、伝寂蓮筆本・書陵部本の中間的なものであることも含めて、本論では述べ得なかつた両本歌句の詳細な検討を今後の課題としたい。

〈送〉

(1)『大江千里集』諸伝本間の関係については、拙稿「大江千里集」伝本考——流布本系統を中心に——（『中古文学』第四十三号所収）に詳述した。以下の伝本に関する論述は、すべて、本論文を前提としている。

(2)金子彦二郎氏が「秋」部説をとられた（平安時代文学と白氏文集 増補版 句題和歌・千載佳句研究篇）参照。以下の金子氏の御説はすべてこれに拠る）が、山岸徳平氏が「夏」部からの混入を推測され（『深養父集と千里集』（『山岸徳平著作集Ⅱ和歌文学研究』所収）参照）、橋本不美男氏も山岸氏の御説を支持された（『流布本「大江千里集」（句題和歌）の原型について』（『季刊リポート笠間』創刊号所収）参照）。

(3)竹原崇雄氏「大江千里『句題和歌』の成立——久遠歌の処理について——」（『文学』第五十五卷第二号所収）より引用。

(4)金子氏の御研究により、出典は『白氏文集』中の「病中書事」

であることが明らかである。『白氏文集歌詩索引』（同朋舎出版）記載の同詩は次の通りである。（篇目番號233）

三載臥山城 閑知節物情
罌多過春詣 蟬不待秋鳴
氣嗽因寒發 風痿欲雨生
病身無所用 唯解卜陰晴

(5)金子氏の御研究により、
落齒閑華不見人
（『白氏文集』卷第五十三 病中書事）

11あたたえてしづけき山にさく花のちりはつるまでみる人もなしが、「春」部に入っていることが明らかである。

(6)後藤利雄氏「赤人及び千里両集の研究」（『山形大学紀要（人文科学）』第二号所収）参照。以下の後藤氏の御説はすべてこれに拠る。

(7)千里が春という季を好んだことは、既に、拙稿「大江千里集」の歌風（『甲南女子大学大学院論叢』第十一号所収）で触れた。「詠懷」部で半数が春に寄せて心中を詠んだ歌になっているのは、序文に記載されているような二月に命を受け、四月に集を奉進した経緯を考えると、詠作が春に行われた影響であると推測される。

(8)「千里集」中の句題をもつ一五首の内、九〇首の句題出典詩が判明し、二五首の句題出典詩が不明のままとなっている（金子氏前掲(2)同書、および拙稿「大江千里集」の二句題の出典詩の発見」（『解釈』第三十五卷第二号所収）参照）。

〈付記〉本稿は、平成元年度和歌文学会第三十五回大会における

口頭発表をもとに加筆したものです。貴重な御教示を賜りました諸先生方に深謝いたします。

（本学大学院博士後期課程）